学び合いで高める保育者の専門性

保育を取り巻く環境が変わりゆく中、子どもの幸せを保障するために、「保育者の専門性」の向上は園の運営にとって大きな課題です。
今号では「保育者の専門性」の向上が求められる背景、専門性を高める手段、保育者が学びに向き合う際の意識などを三人の識者が解説します。また、公開保育に焦点を当て、地域単位で専門性の向上に取り組む事例をご紹介します。
それらを通して、各園が具体的に取り組むヒントを考えていきます。

課題提起

日常的な語り合いで学び合いを促し保育者の専門性の向上を

2023年11～12月に行われた「第4回幼児教育・保育についての基本調査」*1（以下、本調査）には、管理職を含めた保育者の資質・能力の維持、向上に課題を感じる保育現場の実態が表れています。本調査の監修者の1人である汐見稔幸先生は、園を取り巻く環境が大きく変わる今、保育者の専門性の向上が必要だと語ります。子どもの幸せな未来を形づくるサポートをするために、園はどのような専門性をいかにして高めていくべきか、お話をうかがいました。

白梅学園大学 名誉学長
東京大学 名誉教授
汐見稔幸先生（しおみ・としゆき）

東京大学大学院教授などを経て、2007年から2018年まで白梅学園大学・短期大学の学長を務める。現在は白梅学園大学名誉学長、東京大学名誉教授、日本保育学会理事（前会長）、一般社団法人家族・保育デザイン研究所代表理事などを兼任。著書に『新時代の保育のキーワード：乳幼児の学びを未来につなぐ12講』（小学館）など。

園は、子どものウェルビーイング*2を支える重要な担い手

保育者の専門性の向上を支える環境が十分に整っていない

社会環境の変化による保護者のニーズの多様化、特別な支援が必要な子どもへの対応など、保育現場は多くの課題に直面しています。また、コロナ禍を機に子どもが外で遊ぶ機会が減ったことで、自然の中で五感を使って過ごす経験が不足しがちになり、環境面でも子どもの育ちに変化が起きています。こうした課題を乗り越えるため、保育者には新たな知識やスキルを身につけて、専門性を高めることが求められています。

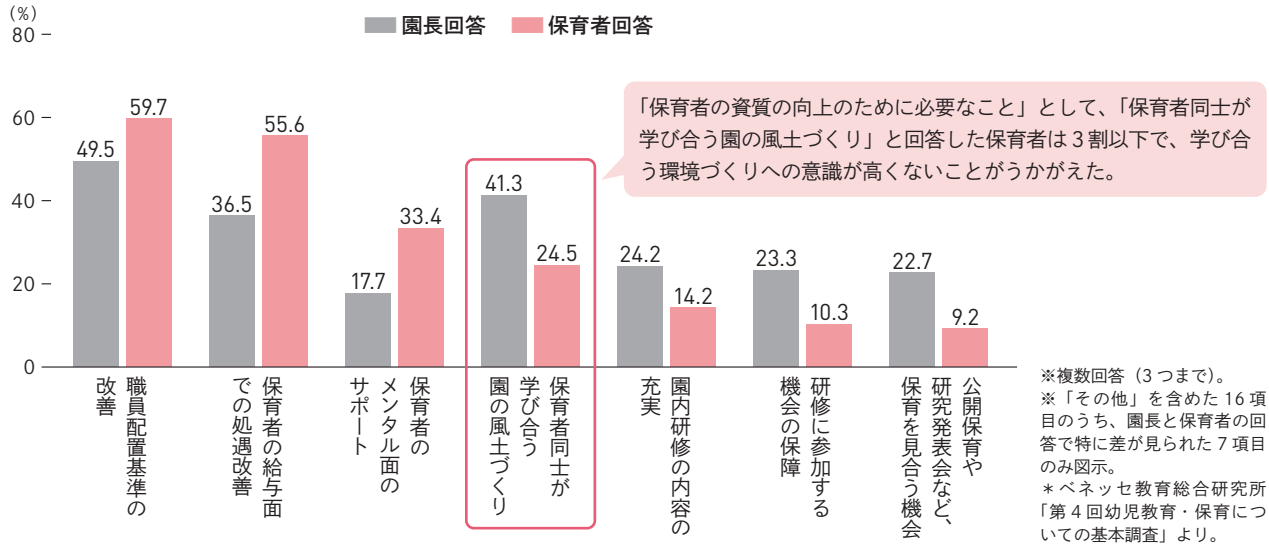
一方で、そうした保育者の成長を支える環境が十分に整っていない状況も見えてきました。その背景の1つに、待機児童問題への対応として園の数を急速に増やしてきた施策の影響があります。園の数が増えるとその分だけ働き手が必要になるため、スキルや経験が十分でなくても、園長や保育者として働かざるを得ないケースが出てきます。それにより、各園の理念や方針がうまく引き継がれず、保育レベルの低下が起こりやすくなってしまうのです。

本来なら、国は保育の受け皿を増やすのと並行して、保育者の専門性の維持・向上を図る研修などを充実させるべきでしたが、必ずしも十分ではありませんでした。国の施策が整うには時間がかかりますから、園は自助努力により、保育者の専門性の維持・向上を図っていかなければならない状況にあります。

では、園はどうすればよいのでしょうか。私は、園内で「こういう保育をめざそう」といった理念を共有し、保育者同士が日常的に学び合う環境づくりが欠かせないと考えています。しかし、本調査の結果を見ると、「保育者同士が学び合う園の風土づくり」を重視すると回答した保育者の割合は、3割以下にとどまりました（図1）。

＊1　「第4回幼児教育・保育についての基本調査」は右記のURLをご参照のこと。https://benesse.jp/berd/jisedai/research/detail_240708-1.html
＊2　身体的、精神的、社会的によい状態にあること。

図1 保育者の資質の向上のために必要なこと（全体　2023 年）



※複数回答（3 つまで）。
※「その他」を含めた 16 項目のうち、園長と保育者の回答で特に差が見られた 7 項目のみ図示。
＊ベネッセ教育総合研究所「第 4 回幼児教育・保育についての基本調査」より。

保育者の専門性により子どものウェルビーイングが向上する

そうした状況を踏まえ、園がすべきことを整理していきましょう。まず、園の存在意義を確認するために、こども家庭庁が提示した「はじめの 100 か月の育ちビジョン」＊3 を見てみましょう。これは母親が子どもを妊娠してから小学 1 年生までの約 100 か月間が、人生の基盤をつくる重要な時期になるという考えのもと、子どもにかかわる上で大切にしたい考え方をまとめたものです。

その中心には、ウェルビーイングという概念があります。人の幸せは、身体や心に加え、その人を取り巻く環境や社会の状況がよい状態であるときに感じられるという考え方です。子どもであれば、適切な食事や睡眠、遊びなどによって身体の健康が保たれ、精神的に安心・安全な状態にありつつ、自立が促されるサポートを受け、さらに家庭や園、地域の中で良好な関係性が築かれている、といった状態が想定されます。

園は、そうした子どものウェルビーイングを実現するための重要な担い手です。かつて日本には、家の近所に多くの遊び場があり、子どもたちは地域の人々に支えられながら、群れて遊ぶ中で育ちました。しかし、コロナ禍を経た現代では、子ども同士が安心して集団で遊べる場が失われつつあります。まさに園が唯一の場であるといっても過言ではありません。

図2 幼児期までのこどもの育ちの５つのビジョン

1. こどもの権利と尊厳を守る
2. 「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高める
3. 「こどもの誕生前」から切れ目なく育ちを支える
4. 保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする
5. こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す

＊こども家庭庁「はじめの 100 か月の育ちビジョン」より。

このように、園には現代的な育ちの場を新たにつくり出すことが求められているのです。子どもたちが集団で遊ぶ中で、一人ひとりの特性に合わせて何を体験させるのか、どういった環境を用意するのか、どのように励ますのかなどを考えて具体化していくことで、子どものウェルビーイングは向上していきます。そうした営みを支えるのが保育者の専門性であり、その高まりによって園全体の保育の質が向上していきます。

保育を通していかにウェルビーイングを高めるかを具体的に考える際には、「はじめの 100 か月の育ちビジョン」の中の「幼児期までのこどもの育ちの５つのビジョン」が参考になります（図2）。どれも大切な考え方ですが、例えば２つめの「安心と挑戦の循環」は、保育の実践を見直す重要な手がか

＊3　こども家庭庁が 2023 年から 2024 年にかけて示した「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン（はじめの 100 か月の育ちビジョン）」のこと。

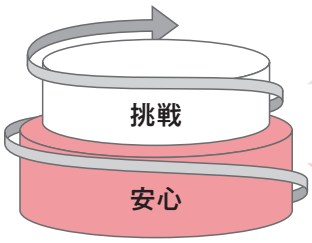
りとなるでしょう（図3）。

ここでいう安心とは、いわゆるアタッチメント（愛着）のことです。不安を感じたら必ずだれかが助けてくれるという安心感があると、失敗を怖がらずに挑戦して、豊かな遊びと体験を生み出していくことができます。

安心感は、子どもを管理するだけの保育では育ちません。一人ひとりの言葉や表情から、「何が好きか」「これが怖いのか」といった思いを感じ取り、その子どもにふさわしい環境を丁寧につくることで高まっていきます。そうしたサポートは、保育者の重要な専門性の１つです。特に０～２歳児は言葉で思いを伝えることが難しいため、保育者には高い専門性が求められるでしょう。

図3 安心と挑戦の循環

乳幼児の育ちには「安心」と「挑戦」の繰り返しが大切



豊かな遊びと体験	様々な人や自然・絵本などの環境と出会い、興味・関心に応じた「遊びと体験」をすることで、外の世界へ「挑戦」
アタッチメント（愛着）	こどもが不安なときなどに身近な大人が寄り添うことや、安心感をもたらす経験を繰り返すことが、「安心」という土台を築く

＊こども家庭庁「はじめの 100 か月の育ちビジョン」より。

保育者同士の日常的な語り合いで専門性を磨く

３つの観点を意識して日常的な語り合いを深める

保育者の専門性を高めるために、園ではどのようなことを心がけ、実践していけばよいのでしょうか。

保育の出発点は、子どもを「観察」することです。保育に限らず看護や介護など、あらゆる社会的実践は必ず観察から始まります。保育では、一人ひとりの子どもに相対しながら「この子はなぜ１人で遊びたがるのか」「このかかわり方でよいのか」「もっと違う環境があるかもしれない」など、毎日丁寧に観察して適切だと思われる支援をし、うまくいかなければさまざまなことを試します。そうして、各園で自分たちの形をつくり上げていく保育は、試行錯誤の実践だといえるでしょう。

園が自分たちの形を見いだすためには、保育者同士の語り合いを日常化していくことが必要です。保育者が観察したことを持ち寄って語り合うことで、子ども理解はさらに深まります。これを「リフレクション」（内省）といい、日常的な園内研修として大きな意味をもちます。

リフレクションでは、午睡の時間や園児の降園後などに時間をつくり、４～５人のグループでそれまでの保育を振り返って、「面白い姿が見られた」「こんなことに感心した」など、ポジティブなことを伝え合いましょう。他の保育者の言葉を聞くことで、「そんな捉え方もあるのか」など、子どもの見方が広がっていきます。その際、互いにアドバイスし合うことよりも、若手やベテランなどの立場を気にせずに、対等な視点で自由に語り合うことを大切にしてください。それぞれが口にした何げない気づきの中に、大切なことが潜んでいることも多いものです。時間が経つと印象的なこと以外は忘れてしまいやすいので、できるだけその日のうちに語り合いの場を設けるとよいでしょう。

リフレクションを通して子ども理解を深めたら、それをもとに、次にどのような体験や環境を提供するかを考えます。そのように子どもが発するさまざまな情報を受け取って取り組みを振り返り、その後の保育を検討することを「アセスメント」といいます。

図4 保育者同士の日常的な語り合いによる園内研修

観察 → リフレクション → アセスメント

子どもの言葉や表情などをじっくりと観察して、そこに込められた思いや考えを読み取る。子どもに共感する気持ちで観察することが大切。

保育者がグループになり、子どもの観察を通して気づいたことや感じたことを率直に語り合う。他の保育者の視点に触れて、子ども理解を深めていく。

リフレクションを通して子ども理解を深めた後は、次の保育で子どもに体験させたいことや必要な環境、声かけなどを検討する。

目の前の子どもたちに合わせて試行錯誤を積み重ねる保育には、決まった正解はありません。だからこそ、保育者同士の語り合いによる園内研修を習慣化し、観察、リフレクション、アセスメントを循環させて、園がめざす保育をつくり上げていく姿勢を大切にしてください（図4）。

保育者のウェルビーイングを意識し、安心と挑戦が保障された環境づくりを

日常的な語り合いによる園内研修とともに、保育者が専門知識を学ぶための研修も重要です。全員で要領・指針[*4]を読み込んだり、専門家を招いて講義を受けたり、テーマを設定してワークショップ形式で話し合ったりする研修を通して、子どもの姿や育ちを理論的に整理できるようになります。子ども理解がさらに進み、リフレクションやアセスメントも深まりやすくなるでしょう。

そして、年１回は園の取り組みを長期的視点から振り返ることをお勧めします。「１年間の実践を通してどこが進歩したか」「来年は何をよくしたいか」など、実践内容だけでなくその意味や今後の展望を語り合うことで、園の理念はいっそう明確になり、保育者一人ひとりが取り組むべきことも見えてくるでしょう。

園の取り組みを振り返る際は、保育者の働く環境にも目を向けてください。「はじめの100か月の育ちビジョン」には、保育者を含む、保護者・養育者のウェルビーイングを高めることの大切さも述べられています。保育者同士が互いのありのままを認め合うことを通してウェルビーイングが高まり、自分を大切にできるようになれば、子どものよい面にも気づきやすくなるでしょう。保育者が安心して働き、新たな挑戦をしたくなる環境を整えることが、子どもの幸せな未来を形づくる保育につながっていくのです。

保育者のみなさんへのメッセージ

子ども・保育者のウェルビーイングを高めるため、園長先生が中心となり、悩みなどを含めて保育者が率直に語り合える風土をつくっていってほしいと思います。さらに保育者に求められる専門性の高さを外部に発信するためにも、地域のニーズに応えて、地域で不可欠な存在となることをめざしましょう。私自身も国や外部に対して、保育者の専門職としての地位を高める提言を続けていきます。

＊4　幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を指す。